感動と古代史（三）

――福士幸次郎先生に――

今井富士雄

五

昔「民族」と云う雑誌があつた、三年半ばかり続いて終つてしまつたけれども、柳田国男先生が中心になられて、民俗学は勿論、人類、考古、言語、伝説と各方面に亘つた綜合人類学雑誌とも云うべき学術誌である。その頃中学生であつた私は此の雑誌の愛読者となり、少年らしい率直さで投書をしたりしたものである。その頃「花折りに」の童謡の項に自分の名前が小さな活字になつてのつているのを見て胸を踊らせたこともあつた。

当時青森県の片田舎の少年に過ぎない私の所に、東京の柳田国男先生から小さな印刷物の小包みが届けられた、開いてみると「土のいろ」という謄写版刷りの地方雑誌、此れには先生の「蟷螂考」がのつて居り、もう一冊のパンフレットは「シカの耳」という、此れもその頃先生が中央公論かにのせた文章の抜刷りであつた、此の文章の初めの方には青森県の山奥の岩にシカの角を彫つたものがあることを書いてあつた。どうして突然此んなものを送つて下すつたのかそのわけが良く分らなかつた。

丁度その頃、柳田先生の所を訪ねた福士先生に私からのハガキを見せたことから、福士先生と私の関係も分り、それではと云うのでわざ〳〵送つて下すつたものであることを知つたのは隨分後年になつてからのことであつた。

その後上京して、先生のお宅を訪ねたのは今の成城に引越しされて間もなく、漸く落着かれた頃ではなかつたかと思われる。兎に角あの広い書斎と、窓の他は全部造り付けになつ

ている本棚の夥しい書籍には驚いてしまつた。私の頭の中ではそれから暫らくの間、広さは幾坪だつたかしらと計算してみたり、ハシゴのかかつた本棚の高さを思いかえしてみたりしたものである。

「お父さんが医者ならば、医者になつて、そのかたわら学問をするようにしなさい。私の兄なども医者で忙しかつたが菊作りを始めてから時間が出来るようになり、かえつて勉強出来るようになつた。医者の方がはやらなければそれでなお勉強出来ることになる」とおつしやつて下すつた。お兄さんの井上通泰氏は作歌や風土記研究などで有名な人だが眼科のお医者さんである。「西洋では裁判官がよく勉強するが日本では忙しいので出来ない、自分も役人をしていた時に、大学二つに講義に出て忙しい想いをしたがそんな時の方がかえつて勉強出来たものだ」と云つておられた。いきなり学問のなかに入らず、若い者を前にして先づ生活のことから考えて下すつたことは有難いことである。私はその時浪人をしていた時代であつたが、医者になるかならないかは我々父子間の大きな問題であつた。私は医者になるのがきらいであつたばかりでなく、学問をやるならそればかりやれば良いのであつて其他のことは一切考慮を払う必要がないものと自分で決めていた、従つて何か一つの職業につきながらそれと違つた勉強をするのは学問に対する冒瀆のような気がしていたのである。後になつて色々な目に会つてみると此のような狭い純粋な考え方だけでは世の中に通じないものであることが分つて来たし、むしろ結果は逆になる場合が多く、素直に親の跡を継いで医者になつて居ればかえつて好きな勉強も出来たのではなかつたかと思うたことも度々であつた。

丁度その時、傍の大きな机に座つて勉強していた三四人の人達のなかに弘前出身の斎藤吉彦氏が居て、先生に紹介されて私達の方へ立つて来られた。後にも先きにも此の時一回限りの挨拶で別れてしまつたが、斎藤氏は福士先生とも親しく慶応の若いフランス語の先生で、言語学方面の研究を期待された儘早世されてしまつた。「民族」に津軽のことわざを書いたものが載つている。私のことを今井少年として何かに書いてあるそうだがそれを未だ見たことがない。福士先生の地方主義・伝統主義の評論集とも云うべき「郷土と観念」の巻頭の写真には、福士先生と斎藤氏等四人が異様ないでたちで津軽平野の真中に立つている、その下の説明には「この内斎藤吉彦君は稀れな秀才で、塾並びに民俗学の柳田国男氏からも将来を嘱望され、わが地方主義の智的建設に多大の貢献があつたが、昭和五年惜しくも夭折した。尚この写真は大正十四年八月一行が五林平部落見物の途で撮つたものである」と書いてある。

弘前市に於て友人達の追悼会があつた時には福士先生も出席され、斎藤氏の数は少ないが短詩なども読まれたが、福士先生はその時の詩を評して、佐藤春夫みたいだがそれよりは

旨いと云つておられた。

柳田先生が医者になることをすすめて下すつたのは、親の跡を継ぐということの他に、民俗学は地方の学問であるからそれを研究するには地方に腰をすえなければいけないというお考えもあつたのだろうと思われる。その頃の自分は学問に生涯を捧げたいと思つてはいたが、その学問の内容に就ては漠然たる考えしかなく、細かく分けて考えてもいなかつた。ただ何んとなしに人間とは一体何んだろうとそれを知りたかつたことと、それに関連して古いことに妙に心が惹きつけられていた。それも普通の歴史学では自分の求めているものは得られないだろうとの予感はあつた、「民族」が気にいるのも広い学問的領域に亘つているからではないかと思う。

先生から「青年と学問」という本を頂いて読んだ時には実に感服した。「私などは根が俗人である為か、学問に世間実益の有無を問はれるのは当然だと思つて居る。さうして結局政治を改良し得れば、学問の能事了れりと迄考へて居る」此んなくだりには実に共鳴を禁じ得なかつた。此れは柳田先生の学問を貫いている筋金ではないかと思う。民俗学は新しい学問である為めもあるが、アカデミズムをきらう根本的原因が此のあたりに潜んでいるような気もするし、又そこが我々を惹きつけるところではなかろうか。

弘前市に於ける朝日新聞社主催の講演会には、柳田先生の「東北と西南」という題目の御講演があつたので私も聞きに行つた。その時斎藤吉彦氏の実家、斎吉旅館にお訪ねした時には先生お一人で、色々お話をすることが出来た、その頃には自分も考古学志望ということが可成りはつきりしていたように思う、先生に此んなことを云われたことを覚えている。

「今の考古学は物ばかりの研究だから面白くない。例えばシャモジの形にしても、今みたいに平たくなつているのは此の頃なので、昔はもつとふくらみがあつた。つまり御飯がやわらかいか固いかによつて形が違つて来るのだ、形の変化によつて昔の人はどんなものを食べて、どんな生活をしていたかを良く考えてみなければいけない、シャモジの形ばかりの研究で終つては何んにもならない」此れはまことに至言であると思う。自分は今でも考古学の入口をウロついているのも本当に此の言葉を生かせないからだと思う。又考古学にあきたらなさを感ずるのも此の点である。

ロダンの伝記を読むと、彼が若い時彫刻の師匠に、「物を表面で見ないで奥行きで見なさい」と云われ、それを聞いてから作風が一変したということであるが此れは本当に大切なことであると思う。

地方の学者は「そうですか」と云えない、「そうですねえ」としか云へない、可哀想なものだ。なかにはえらい学者もあるが、そんなのは鳥なき里の蝙蝠で……と痛切に若い私をいましめられたのもその時のことであつた。

成城高校に入つてからは先生のお宅も近いので時々お邪魔

に上つていた。丁度その頃歴史や地理研究の機運が生徒間におこり、同志を集めて地歴研究会をつくることになり、先生にも講演や座談会をお願いしたけれども大変快く引受けて下すつた。今では大阪市大に居て国史の方の先生になつていると思うが平山敏次郎君などは初めはむしろ東洋史志望だつたのに、民俗学から国史の方へと転向したのも先生の感化を受けたからである。先生はよく面倒を見て呉れて、九州への旅行には平山君を一緒に連れて行つて下すつたことがあるが、洋式の便所で用を足す時には多少前こごみになると具合が良いということまで注意を与えて貰つたそうである。実は私も小学校卒業した頃、初めて父に連れられて上京した時、海上ビルの便所に入つてどうしたものかと途方にくれたことがある。父が帰りが遅いので心配して迎えに来て呉れたが、高い縁に腰をかけてみたり、上つてみたりしていたのであつた。

研究会の講演を頼みに東大の地理学教室に佐々木彦一郎氏を訪ねた時には、徹頭徹尾柳田先生の学問の礼讃を聞かされ、それも一つ一つの論文の名前をあげて云うものだから、帰つてからもう一度読みかえしてみたりしたものである。実際先生には思わぬところに崇拝者が居るのに驚かされることがある。文士などにもあの沢山の著書を全部揃えていると自慢にしている人もあるそうである。

考古学は、いつでも先生の悪い例に引き出されるので、なかには本当に此の学問をきらつているのかと思つている人もあるらしいが、実は先生も好きなのではないかと思う、道楽になつてしまう危険があるのと、もつと学問として何んとかならぬものかと思われているのであつて、くさすことによつて民俗学の学問性を高める手段としているのではないかと思うくらいである。高校生の頃にソラスの古代狩猟人の厚い原書を取り出して、此れを読んで見給えと渡されたことがある。読むのも面倒なり、読まずにお返しするわけにも行かず、暫らく机の下でほこりをかぶらせていたが、ざつと読んで何を聞かれるかとビク〳〵しながら持つて行くと、大したことも聞かれなかつたのでホツとした。その時、此んな本をもう四五冊は読ませたいのだがとおつしやつた。

先生の所へは必ずしも学問のことばかりで伺うわけではない、人生の一大事があると先生は何んとおつしやるかと御意見を聞いてみたくなる。ふだんは何んとなく怖い気がするので滅多に行かないことにしているのだが、例えば東北地方に経済恐慌がおきて、地方銀行がバタ〳〵とつぶれた時にもどんな具合になるものかと聞きに行つたことがある。「他では昔からの豪農がみな滅んでしまつたけれども、東北地方にはまだそんなのが残つていたのだが今度はどんなことになるだろうか」とか「此れでも大きな三井とか住友などの銀行は大丈夫なのだろう」という風の話を聞いているうちに心が落着いて来る。滅ぶものは滅べ、倒れるべきものは倒れろと、初め自分のことばかり考えていたのに段々と気が大きくなつて

心が落着いて来るのであつた。長い間の役人生活と新聞人としての世の中の観察から来る先生の眼は学問ばかりしてきた学者とは根本的に違つたものである。

先生の受けた近代的教養は良い意味の個人主義者の一面をそなえさせたような所もあつて、古風の研究者にあり勝ちの尚古主義とか温情一点張りでない、学風を慕うて集つて来る者に対しても時に峻厳なる態度を以て臨まれることも稀れでない。

愈々卒業も近づいて大学の志望科目選定の期が迫つて来た時には実際困つた。地歴研究会の活動は続けていたけれども福士先生の所にもしよつちゆう出掛けていた関係で色んな詩人達とも接触する機会が出て来た。殊に吉田一穂氏の所は通学の途中にも当つていたので連日立寄つては夜遅く迄話しに耽つた。電車が無くなつて、松原から笹塚迄小一里の道を歩いて帰ることも珍らしくなかつた。そのうちに白秋・幸次郎両大人の間でくわだてた「新詩論」は一穂氏が編輯を引き受けることになつたので私も助手になつて手伝つた。一穂氏とは福士先生の所で知合いになつたのだが、日本の始まりを詩に書きたいと云うことから、私の持つている考古学関係の書籍を代り代り持参したり、話をしたりしているうちに段々と意気投合するようになつたのである。此の時の成果は「黒潮回帰」という立派な評論集として実を結んだわけである。あらゆる方面に亘つて鋭敏なる直感と、透徹した見解を持ち得る人であつて、学問的にも教えられる所が多かつた。阿部六郎先生の所で中原中也氏に会つたのが縁で時々私の所にもやつて来たり、一緒に酒を呑まされることも度々である、一緒に歩いている途中で酒屋をみつけると、一杯ひつかけたり、突然自作の詩を感に堪えないように唄い出す。福士先生はまだ本格的な古代研究に入つていない、伝統主義の闘士であり日本語のリズムの研究に沒頭していて「日本音数律論」を金星堂の現代詩講座に書いていた。本屋で参考書を見つけて買つてあげると、暫らくは会う人ごとに私の居るまえで、此の人は私によく勉強をする御ほうびに本を買つて呉れた人ですよと如何にもうれしそうにニコ〳〵しながら私の顔をみながら云われるので照れ臭くて参つたものだ。阿部六郎先生の所にもよくお邪魔した。夜遅く書斎の雨戸をそつと敲くと、書見をしていた先生が誰れかと云う、私だと分ると雨戸を明けて中に入れて呉れ、ドイツ語で声をたててツアラトストラを読んで呉れる、ダヴィンチの描いた謎めいた女の小さな写真をピンでとめてある此の部屋には妙な神秘的気分が漂つていた。自らは語ろうとしないが、我々の云うことはどんなことでもものみこんでしまうような此の部屋の主人公は我々若い者の深淵であつた。ゲーテ・ニイチェ・ドストエフスキーと段々深刻なものを読むようになつてきた、夜明け近くまでそんな小説に読み耽けることも度々である。西田幾多郎先生の講演には二度も出かけた、そんな時にも一穂氏や阿部先生達と

一緒に行くのである。吉田秀和君と二人で良くあつちこつちと歩きまわつたものだから、結局それ等の人達みんなを共通の知り合いにしてしまつた。そんな人達の間を飛び廻つているうちに段々と文学の世界、芸術の世界に眼がひらけて来た。人生に対する疑問を生まなものにぶつつけたくなる、宗教講演会などの後では、講師に道を歩きながらでも質問をしたりしたものである。段々と泥や石ころを対手の考古学では收まらなくなつてきた、然し大学に行くとなると歴史科よりあるまい、芸術や文学をやる気にはなれなかつた。高校時代に余りに奔放に振舞つていうちに收拾がつかなくなつてしまつた格好である。さて具体的に大学を何処の何科にしようという段になつて迷うのも無理がない。

志望の問題で柳田先生の所に伺つた時にはそれでも大体は国史にしようと決めていた。歴史をやるなら国史しか出来ないものと思つていた、然し何んとなく国史の窮屈なのもやりきれないような気がしていた。先生もその辺のことは良くお分りになつたらしい「社会心理学か心理社会学か、どつちになるかは知らないが兎に角そんなものをやつてみてはどうか」と云うて下すつた。新しい学問のことをしきりに考えていられたわけである。さて実際問題となつて何処の大学で誰れ先生につくかということになると先生にもお考えはなかつたらしい。若し国史を專攻するとすれば京都大学の西田直二郎先生だろうかということであつた。或人が東大の先生を神道イズムと仏教イズムだと評して居りましたと名前を挙げて云つた時には「そんなものですらない」と一言はつきりおつしやつたのにはびつくりした。医者になれば良かつたにと此の時も先生に云われたので、実は自分には気の弱い所があつて、病人の結果が悪いと自分に責任があるような気がして苦しむのではないかと思われる、そんなことが厭で医者になる気がしないのですと云うたら「それは神経衰弱だ、もつと旨いものを食べて余り勉強しないようにし給え」とおつしやつた。

最後迄国史にしようか、それともいつそ哲学にしようかと志望決定に迷つた末、京都の哲学科に入ることにきめてしまつた。その後数年経つてから、医者の家に育つた者でないと分らない恐怖の心理を福士先生に云つた時には「それは芸術家の気持だよ、君は芸術家だから」と云つて呉れた。そう云われてホツとした気になつたものだ。

柳田先生の所には来客が絶えない、日本各地からやつて来ては先生の所に立寄る、先生も実に親切に話をして下さる。それが又先生の学問にとつて大切なことでもある。そばにおれば自然と話しつぷりが我々にも分つて来て大変勉強になるような気がする。秋田県から上京して来たという老人に「昔の人は女でも下に何かはいて居りましたか、御存じありませんか」と聞いている「はいて居りました」「それは何んと云いました」「コバカマと云うようです」「はあ、それで分りま

した、まさか今の女の人みたいに不用心なわけはないと思つて居りました。あれでは外に出て仂けない、そんなことは昔の本を見ても書いてない、今までは古いところでは諏訪縁起の絵巻に、狂女裸になつてあばれ出すというくだりに出て来る女の人が、腰にはいているものでそれが分るくらいのものでしよう」こういう具合に問答が静かに行われて、日本服飾史の変遷が一部究められているのだ。労仂の歴史から考えても女性の地位から考えても此れは軽視されない事柄である。

旅行も良くされるけれども、おそらく一木一草ゆるがせにしない観察は全く素晴らしいものがある。京都に泊つて気のつかれた夜半の小雨、海の青さと豆腐の白さ、坦架に乗せられて運ばれている病人の、田舎では珍らしい洋服を着た先生を「医者ならば良いに」と見上げる目付きを読むあたり、書斎の中にばかり閉ぢこもつた学者には到底出来ないことである。それとも此れは結局は人間の問題であつて、そんな人だからこそ先生の学問が旅をさせたのかも知れない。

「柳田先生のえらいのは、何か調べる時には日本中何んな所へでも、先生が手紙を書かれるとちやんと返事を貰える所にある」と中谷治宇二郎氏はいつもうらやましそうに口にしていたが、それが出来るということは大変なことで、結局先生の学問というものは先生の人間に較べては氷山の海面に浮んでいる部分に過ぎないのではなかろうか。

敗戦の後、私は真剣な気持で先生の所へ行つて「神道論」を書いて下さいとお願いしたことがある。日本の再建にはどうしても国民信仰が一番大切であると思われ、その実体をはつきりさせるのは民俗学より他にない、此の際先生に将来の見透しについてのはつきりとした御考えを伺つて置きたいと思つたからであつた。今から考えれば此れは虫の良過ぎる考えであつた、今でも此の問題をとくのは学問によるしか道はないと思うけれども、学問の道は遠く嶮しい。先生の此頃の御講義を拝聴していると益々そう思われてくる。

「筆者が柳田国男氏の民俗学に注目し、同氏に書簡を送つて指導を初めて受けるに到つたのは、大正十四年の事である。幸いに柳田氏から悦んで迎へられ、上京した折りにはいつも長時間に亘りお邪魔したのをお厭ひなく、詳細にわたり御教示に与つたのは感謝に堪へない。尚序手ながら筆者は伝統主義といふ特定の思想に立ち、従つてその科学的方法論を採る一方、この主義の駆り出す情熱的行動に熾烈化されて、それに激烈な思想的闘争に終始してゐたので、甚だ粗雑粗暴な人間に成つてもゐたのであらう。同氏からは兎角その後御反対を受ける事が多く、その為め昭和三年頃からお目にかゝるのを中止した。筆者から見た同氏の学問も、その博大精緻には驚嘆させられるが、その追求は学問の為めの学問の範囲に止まり、従つてデレツタンティズムの特徴があり、筆者の如く一定の要求に立つものは容され難いものがあつたらう。」

「原日本考」

福士先生は学問を越えた信仰の人であつた、神道について

天皇についてはつきりとした確信に立つていたように思われる。残念なことには私にはその信仰の所がよくのみこめなかつた、絶えず問答を重ねたけれども到底最後の深い心をつかんだとは思われない、それだけに今でも尚一層劇しく私の学問的情熱をかきたてるのだ。

柳田先生から福士先生を見た場合は、学問の限界を踏み越えた危険な思想であり、奔放な詩人の空想に満ちた学説であると思われることももつともなことであるが、心の奥には学問の届かない領域があるのではなかろうか。日本民俗学の方法は、目・耳・心と、最後のものを求めて深まらなければならない、此の鋭い天才的な分類法を教えて呉れた人は外ならぬ柳田先生である。

「日本人が日本のことを研究するのは外国人が日本のことを研究するのとは飽く迄も違わなければならない」とは柳田先生が日頃いつも云われることだが、日本民俗学研究者は、此の独創的な分類法と共に決して忘れてはならない言葉である。目で見て分るものは他国人にでも分る。耳で聞いて分るには、その国の言葉に通じなければならない。微妙なる言葉のニュアンスに至つては他国人には分らない。その先きの奥にある心に至れば到底言語の通ずる所ではないのである。思想・信仰のことになると親子・兄弟といえども通じない場合が多いのである。而も心を得るを以て最後の目的とする奥行きのある分類法を提唱された先生の学問は今後の日本学にとつても甚だ暗示的であると云うべきである。

親が子の成長を見守るごとく、その未来に就て心に期するものがあつてもことさらに口に出さず、慎重に学問を育て、ゆつくりと論証を重ねて行くうちには自然と到達出来る結論を学ぶ、むしろ誰れにでも納得させようという経過のなかにこそ学問のあるような態度は、高年の今となつて「無知の相続」を唱えさせている、然し此の学風も実は先生の心底には日本人の心に対する深い愛と信頼があればこそと思われる。先生の場合それは学問によつて長い間につちかわれたものであろうけれども、出来ているものは心である。それだからこそ論証が生きて来るのだ。

言挙げしないことをもつて特色とする日本人の心は下手な科学の手に負えないばかりでなく、いくら論証を重ねても目的に到達出来得ないものとすれば、或は福士先生のような頓悟した者に近く、主義と行動に於て日本人の心を示す者もあり得る。私は先生の前に自分の信の足りなさを恥ぢる。学問や言葉は尽きないが心と人には尽きるところ究まるところがあるのではなかろうか。

深い心をつかむということは結局は自分の心をつかむことでもあろう、そこに学問と信仰を解くカギがあるのではなかろうか。（未完）

（本学専任講師）